

復 命 書

2014年 5 月 14 日

望月 厚司 様

議員名 佐藤成子

下記のとおり、政務活動費による視察を実施したので、ご報告します。

1 日 時	2014年 5月7日（水 ）18：30～20：30	
2 視 察 先	(1) 都 市 名 視 察 先 施 設 等	全国町村会館2階ホール於 シンポジウム・ 原発ゼロ・自然エネルギー推進フォーラム
	(2) 対 応 者	一般社団法人 自然エネルギー推進会議 事務局
3 目 的	発起人 細川護熙・小泉純一郎・瀬戸内寂聴・菅原文太。湯川れい子・ドナルド・キーン・秋山豊寛・梅原猛灘など著名人が名を連ね、賛同者も市川猿之助・小山内美江子・落合恵子・加藤登紀子・澤地久枝・吉永小百合。なかにし礼・坂本龍一などなどが自然エネルギーで日本のエネルギーを考えるとという推進会議が発足されたということだったのでこれからの参考になると思い参加した	
4 内 容	<p>(調査事項・調査結果を具体的に)</p> <p>映画『第4の革命』や『パワー・トゥー・ザ・ピープル』の予告編の上映からスタートし、財団設立の経緯、細川代表理事の話に続き、小泉発起人代表の挨拶があった。</p> <p>その後、金子勝（慶應義塾大学経済学部教授）・香山リカ（精神科医）・ロバート・キャンベル（日本学者）・桜井勝延（福島県、南相馬市長）・湯川れい子（音楽評論家）のパネルディスカッションが行われた。</p> <p>※成長のために、原発が不可欠と政府が言っているが危惧している。</p> <p>※脱原発成長論・スマートグリッドで座標軸が変わる。大きな時代の変革だ。</p> <p>※発電送電システムの組み換えが必要</p> <p>※戦後最大の環境問題だ。かつてのイタイタイ病など日本最大の環境技術を持って対応した。これらをもって、未来の産業成長へつなげていくべきだ。</p> <p>※脱原発はイデオロギーの問題ではなく、いまを生きる人たちの覚悟の問題だ。</p> <p>※分散型エネルギーで、原発を次の世代に残さない、エネルギーの効率化を図り、成長を促していく。</p> <p>※ヨーロッパなどは、自然エネルギーに切り替えて、地方の発展に結びつけている。</p> <p>※チェリノブイリ、水爆を経験したのに、このままではだめだ。原発は安全でもないし、コストが安いわけでもない。</p>	

	<p>※意識の醸成・与論悪寒がいつようだ。</p> <p>※学問として原発を考えることはできないか。学問の創設はできないかと考える。</p> <p>※相馬市で、人を育てていきたい。一人一人が自覚し今何ができるか、足元を見つめ、語り続けていく。</p> <p>※原発がある限り未来はない。</p> <p>※浜岡原発は断層の上にあり最大限危険だ。</p> <p>※環境問題に続けてかかわってきた。左翼でもなく右翼でもなく、日本という国を愛する心だけだ。</p>
<p>5 成果・市政への反映等</p>	<p>あれだけの事故が起きたのは事実。それに加え、今現在国内の原発は1基も稼働していないが、これまで動いていたそれぞれの原発では、稼働させた時のいわゆるゴミを抱えている。これら処理できる施設がないままの状態におかれている。仮に原発ゼロと決まっても、その処理のために長時間が必要だ。高額な補助金で地方は潤ったかもしれないが、危険も隣り合わせで課題として抱えていたことになる。自然エネルギーをしっかりと開発しそれに見合った生活をしていかなければならないと思う。六ヶ所村も視察したことがあるが、日本の最果てにある危険区域と感じずにはいられなかった。人間が住めなくなる国にしてはならないと思う。福島にも何度となく視察に行ったが、まさにあの地域はゴーストタウン。3・11のあの時間で止まっていた。当事者たちの悲しい声が聞こえてくるようだった。自然災害ではかたづけられない。かつての首長が、180度転換し原発ゼロを叫ぶ気持ちは、本物の声に聞こえた。影響力のある方々があれだけのことを叫ぶのは、やはり、意義あることと思う。賛同するしないは別として、自由にその思いを伝えられることは大事なことだ。議論を重ねる必要性、世論の喚起が必要だ。権力者の一声で社会が動いてはならない。浜岡を抱える私たち。他人事ではないはずだ。今、津波を防ぐ高い鉄板が据え付けられたと聞いているが、自然はそんなに甘くないと思う。颯ごっこで済むことではないと思う。原発の安全神話と安価な投資にはそろそろ見切りをつけるべきではないかと感じた。あくまでも、私たちの生活を支える、エネルギーの需要と供給の視点から考えて、まずは、需要する側での省エネ、創エネ。供給側の技術革新に期待する。国民の6割が再稼働に反対。その8割が0にするのに賛成している。かつて、排ガス規制が技術の向上を生んだ。原発ゼロは日本の活路、チャンスをつくると思う。</p>

(注)

- 1 この別紙は、視察先ごとに作成すること。
- 2 連名により作成することも可能。
- 3 この様式により難しい場合は、別の様式によることができる。